

## 2 野菜

### (1) きゅうり

#### ア 生育経過

5月上旬に定植したほ場や生育初期であったほ場では、低温により生育が一時停滞した。6月以降は平年より高温で経過したことから、生育が前進し、収穫開始が早まるともに、収穫ピークも前倒しとなった。一部のほ場では、芯焼けや葉焼けが発生した。梅雨明け後も9月にかけて高温と乾燥が継続したことから、側枝発生停滞や短節間側枝の増加、成り疲れにより、草勢が低下した。そのような中、9月の降雨により、露地栽培では炭疽病等の病害が多発し、さらに、ハダニ類の発生により、早期に栽培終了となるほ場も見られた。果実は曲がり果や尻細果等の不良果が期間を通して多く、輸送中のフケ果等の品質低下も見られた。

#### イ 病害虫の発生状況

病害の発生は、生育期間を通して少なかったが、9月以降に炭疽病や褐斑病が多発し、早期に栽培を終了するほ場が見られた。

害虫は、生育期間を通してアザミウマ類やアブラムシ類、ハダニ類が多く、8月以降はチョウ目害虫が多く発生した。土壌病害虫は、ホモブシス根腐病の発生は少なかったが、ネコブセンチュウやウイルスの重複感染による萎れや枯死株が多く発生した。

#### ウ 高温・少雨による影響と要因

##### (ア) 草勢の低下

高温により生育が前進し、根量が十分に確保されないまま収穫が開始されるとともに着果量が増加したため、着果負担から草勢低下につながった。さらには、着果量の多い時期に降水量が少なかったことから、土壌の乾燥状態が継続し、根から植物体中に取り込まれる養水分に不足が生じ、生長点や葉焼けに留まらず、側枝発生停滞や弱い状態につながった。

##### (イ) 不良果の発生

高温・乾燥の影響により、十分な葉数が確保されていない状態で着果したため、光合成産物の供給不足、土壌水分不足により不良果が多く発生した。

##### (ロ) フケ果

高温や乾燥により、蒸散や呼吸によって水分が失われ、「しなび」や「ス入り」が発生した。また、高温や乾燥、高夜温により、果実の呼吸が促進され、種子の追熟が進展・肥大し、「先膨れ」が発生した。

##### (ハ) 病害虫の発生

生育が前進したことにより追肥が遅れ、草勢低下となりべと病が多発した。出荷ピーク時の成り疲れで草勢低下が著しい中、地域によっては集中的な降雨などで高温多湿条件が続いたため、炭疽病や褐斑病が発生し、適切な防除ができなかったほ場で栽培終了を早める要因となった。害虫は、定植時より秋期まで高温・乾燥が継続したことから発生が多く、特にハダニ類の多発が散見された。また、アブラムシ類の多発生がウイルス病の発生に影響した。

## (2) トマト

### ア 生育経過

6月以降は平年より高温で経過したことから、初期の生育が前進し、果実の着色も早く、収穫開始は早まった。一部のほ場では高温により、上位葉の葉焼けや生長点の萎れ、芯焼けが発生した。梅雨明け後も高温・乾燥が継続し、落蕾や落花が発生し、果実は小玉化し、尻腐果や裂果、日焼け果等の不良果が多く発生した。特に8月に上段が落蕾や落花し、9月以降の出荷量が減少した。

### イ 病害虫の発生状況

病害は、生育期間を通して地上部病害（葉かび病、すすかび病、灰色かび病等）の発生は少なかったが、8月以降に青枯病が多く発生した。

害虫は、生育期間を通してアザミウマ類、コナジラミ類が発生し、8月以降はオオタバコガが多く発生した。

### ウ 高温・少雨による影響と要因

#### (ア) 落蕾や落花の発生

開花期の30℃以上の高温により花粉機能が低下（花粉稔性の低下）し、開花不良や着果不良、夜間高温での落蕾等を引き起こしたと考えられる。

#### (イ) 果実肥大の抑制（小玉化）

結実後から着色期までに高温・乾燥が継続したことから、土壌水分が不足したほ場では果実肥大が抑制され、小玉化につながった。

#### (ウ) 生理障害果等の発生

直射日光を受けた果皮が老化し、土壌水分や空中湿度の急変により裂果が発生した。また、土壌水分不足に伴うカルシウム不足及び窒素過多により尻腐果が発生し、果実表面への過度な太陽光の受光により日焼け果が発生した。

## (3) アスパラガス

### ア 生育経過

春どりは、半促成栽培と露地栽培ともに平年より気温が高く経過したことから、萌芽開始が早まり、一部では凍霜害が発生した。夏秋どりは、半促成栽培と露地栽培ともに平年並に収穫が開始された。梅雨明け後は、高温・乾燥により萌芽の停滞が見られ、穂先の開きや曲がり等が発生し、品質低下が見られた。特に、かん水設備の無い露地栽培ほ場では、出荷量が著しく減少した。

### イ 病害虫の発生状況

病害は、露地栽培では6月下旬より茎枯病が発生した。施設栽培では、7月から斑点病や褐斑病が発生し、8月以降に急増し、平年と同程度の発生となった。

害虫は、アザミウマ類やハダニ類が多く発生した。

### ウ 高温・少雨による影響と要因

露地栽培では7月から8月にかけて降水量が少なかったため、土壌の乾燥状態が続き、萌芽や若茎の伸長が抑制された。また、高温や乾燥により穂先の開きや曲がり等の発生につながった。

#### (4) ピーマン

##### ア 生育経過

6月以降は平年より高温で経過したことから、生育が前進し収穫開始がやや早まり、収穫ピークも前倒しとなった。梅雨明け以降も高温と乾燥が継続したことで、平年より草勢低下がやや早く見られ、花落ちや尻腐果、日焼け果等の不良果が多く発生した。

##### イ 病害虫の発生状況

病害は、7月より斑点病が平年より多く発生し、8月下旬頃には軟腐病による腐敗果のコンテナへの混入が見られた。

害虫は、アブラムシ類やアザミウマ類、ハダニ類が発生し、アブラムシ類の媒介によるウイルス病も発生した。7月以降はオオタバコガがやや多く発生した。

##### ウ 高温・少雨による影響と要因

###### (ア) 草勢の低下

高温の影響から生育速度が早まり着果負担が増加し、平年よりやや早く草勢が低下した。特に、土壌水分が不足するほ場では草勢低下が長く続いた。

###### (イ) 生理障害果の発生

高温や乾燥により土壌の乾燥状態が継続し、かん水量が不足するほ場が多く、尻腐果が多く発生した。また、直接日光が当たり続けたことで日焼け果が発生したり、草勢低下と連動し曲がり果等の不良果が発生した。

#### (5) サヤインゲン

##### ア 生育経過

6月以降は平年より高温で経過したことから、生育が前進し、収穫開始も早まった。また、継続した高温により落花が多く発生した。7月播種の作型では、高温や土壌水分不足により発芽率が悪く、まき直しするほ場も見られた。また、曲がり莢や不稔等の不良莢が多く発生し、出荷量は平年を下回った。

##### イ 病害虫の発生状況

病害は、7月中旬から角斑病が発生した。

害虫は、アブラムシ類やアザミウマ類、ハダニ類が継続して発生した。

##### ウ 高温・少雨による影響と要因

###### (ア) 不良莢の発生

30℃以上の高温により、花粉機能の低下（花粉稔性の低下）から、落花が発生した。また、高温や土壌水分不足により、不受精や草勢低下が起こり、曲がり莢や不稔等が発生した。